

役場の対人援助論

(3 9)

岡崎 正明

(広島市)

朝ドラ×対人援助！？

※注意※

今回はネタバレ注意の話が多い回となっております。NHK 朝の連続テレビ小説「おかえりモネ」を今後観るつもりの方は、その点ご了承ください。

はじめに

2021 年度前期の NHK 朝ドラ「おかえりモネ」は、朝ドラ第 104 作目として 2021 年 5 月 17 日～同年 10 月 29 日まで放送されたドラマだ。

東日本大震災の被災地である、気仙沼の離島出身の主人公、永浦百音（「ながうら ももね」と読むが、あだ名がモネ）が気象予報士となり、故郷との関わりを模索していく中で成長していく青春群像劇一。ざっと説明するとそんな感じの物語である。

個人的には脚本とか映像とかテーマとか、全体的にとっても好きな作品で、正直ドハマりした。出ている役者さんもみんな好感度が上がったし、ロケ地巡りも行きたい！誰かこの感情を分かち合いたい！！キャー！！

…ただドラマの好みは人それぞれ。なのでこの場で私の趣味を押し付ける気は毛頭ない。

ではなぜ、今回このドラマを取り上げたかということ、いくつかの場面が「対人援助」というフィルターを通してみると、なかなか興味深い気付きを与えてくれた。そんな体験が結構あって。というわけで、少しだけこの場でそのことをシェアできればと思っている。

「誰かのため」にひそむ罠

主人公のモネは震災の時にたまたま島にいなかった。それもあって故郷や家族、友人のために「自分は何もできなかった」という無力感を抱いて生きていた。そんな中で出会った気象予報士という仕事に、「私も誰かの役に立てるかもしれない」との思いを抱き、資格をとって東京で気象関係の会社に勤め始める。

ある日モネが仕事仲間や友人と何気ない会話をしていたときのこと。モネは同僚のお天気キャスターから、

「人の役に立ちたいとかって、結局自分のためなんじゃん？」
と言われる。

また、物語の中で重要な役割を占める青年医師・菅波からも

「あなたのおかげで助かりましたっていうあの言葉は…麻薬です」
という言葉聞き、『誰かのため』『人の役に立つ』という価値の中に潜むものを考え始める。

公務員は憲法で「国民全体の奉仕者」とされている、まさしく「誰か（国民）のため」に働くことを義務づけられた職業である。

「市民の役に立ちたい」「この町のために何かしたい」といった志望動機は、採用試験での模範回答だ。むしろ「安定した収入が魅力」も悪くないのだけれど。

そして医療や福祉・教育など対人援助の世界でも、「誰かのために役立ちたい」「ありがとうと言ってもらえる仕事がしたい」といった動機づけは、定番中の定番といえるだろう。

そんな風に考えると、役場の対人援助職は二重の意味で世のため人のためを目指して働く、まさしく“誰かのため仕事業界”のナンバーワンということになるかもしれない（そんな業界があればだが）。

しかしこの「誰かのため」というワードは、実は結構な落とし穴をはらんだ言葉だったりもする。およそ 20 年の役場の対人援助業務の経験を通して、そんな気が強くしている。

「誰かのため」が加速し過ぎると、強い副作用が出る。

代表的なものの 1 つが「燃え尽き」だ。「あの人のために…」「あの家族のために…」と自己犠牲的な姿勢が強まると、そのことが報われないと必要以上に傷つき、無力感に襲われていく現象を引き起こす。一生懸命な援助職ほど、陥りやすい罠である。

また、期待した成果が出ないと相手に怒りや憤りを覚える「逆転移」も、ありがちな副作用の 1 つだ。「こんなにしてあげてるのに…」「どうして分かってくれないんだ…」と、対象者や関係者を非難したり、他責的な感情が芽生え始め、無意識に見返りを求める心性が働きがちになってしまう。

対人援助の仕事をした人であれば、多かれ少なかれ感じたことがあるであろう、こうした感情は、援助職が健康を保ち、対象者とのより良い関係を築く上で、大きな課題となる。

「役に立つ＝素晴らしい」だけど・・・

ドラマの中では菅波が「あなたのおかげ」が麻薬だと述べた理由をこんな風に語る。

「気持ちいいでしょう、単純に。すべての不安や疲れが吹き飛ばす。自分が誰かの役に立った。自分には価値がある。そう思わせてくれる」

「自分が無力かもしれないと思っている人間にとって、これ以上の快樂は無い。脳が言われた時の幸福を強烈に覚えてしまう。麻薬以外の何物でもない。そしてまた言われたいと突っ走ってしまう。その結果、周りが見えなくなる。行きつく先は、全部、自分のためだ」

菅波のこの言葉は、「誰かのため」「人の役に立つ」という価値観が抱える危うさを、辛辣なまでに言い表している。

誰かの役に立てる存在であることは素晴らしいことだ。誰もがそうありたいと思っている。

だがそれは行き過ぎると、己の承認欲求を満たしたいがための、ただの自己満足の行為につながりはしないか。自分の自信のなさや不安を抑えるための、単なるエゴになるのではないか。菅波のこの危機感は、多くの援助職が胸に留めておくべきもののように思う。

また、私はこの「人の役に立つ」こと至上主義みたいなものが加速し過ぎると、「人の役に立たない存在＝価値が低い」という方程式が成り立ってしまう、そんな危険性も抱えているのではないかと、常々思っていて。

私たちは当事者をつい、無力でダメなものに分類しがちだ。でもその考えは、結果当事者を支援がないと生きていけない、依存的な存在に貶める可能性を高めてしまう。そしてその発想は、思い通りの支援ができていない自身の仕事も、不当に低く見積もってしまうのではないかと？そんな自戒と警戒がある。

「どうせ私がやっても・・・」

「あの人ではまたダメだろう・・・」

その究極の行きつく先は、「世の中の役に立たない存在は生きていてもしょうがない」という、あの相模原殺傷事件の植松被告の理論に近いもののような気がしてならない。

己を知る。人間を知る。

「誰かのために」

「人の役に立つ」

その価値観は間違っていない。理想であり、正しい姿だ。

しかし、人の世は理想や正しいものだけで成り立っていないし、正しさは時に暴力性を伴うものだということを、私たちは理解しておくべきだろう。

ダイエットや受験勉強の例をあげるまでもなく、ダメだと思っても、ついダメなことをしてしまうのが人間である。「分かっちゃいるけどやめられない」という歌のフレーズがあったが、あれはなかなか真理を突いている。私たちは自己防衛や、言い訳や、

1人よがりや、ワガママと無縁でいられない存在であり、そんな私たちが作る社会も、理想とはほど遠い部分を多く抱えながら回っている、未熟な世界だ。

別に開き直すわけではないが、そういう人間に対する謙虚な自覚というものは、無くしてはいけないものではないだろうか。

また、そもそも自分のために仕事をするのは悪いことなのか？そんな疑問も湧いてくる。生活費を稼ぐため。自己実現するため。家族を養うため。スキルアップするため。好きなことを職業にするため…。お釈迦様のように悟った存在ではない私たちが働くのに、そんな要素が含まれることはごく自然なことではなかろうか。

私自身の中でも今は、私がこの仕事をする⇒地域が少しでも良い方向に向かう⇒将来私の子どもが暮らす場所が住み良くなる⇒私にとってラッキー♪という、手前勝手な動機が大きかったりする。無論生活費のためでも、自分がやりたい仕事を続けるためでもある。

「結果的に誰かの役に立てればいいな…」くらいの思いはあるが、それも結局は自分が好きでしていることで、つまるところ「自分のため」に帰結すると思っている。そういうわきまえが、このやっかいな正しさが暴走することへのブレーキになる気がしている。

オマケにいうと最近、近江商人の「売り手にとっても、買い手にとっても、また世間にとってもいい結果となる商いが、よい商いである」という「三方良し」の考え方が気に入っており。

仕事の動機付けも、「自分のため 33%、当事者のため 33%、地域や社会のため 33%」くらいがベストバランスかなーと勝手に思っている。

不確実性と付き合う

「おかえりモネ」は気象予報士という仕事の話だけあって、自然を相手にすることの難しさや葛藤、困難も多く取り上げられていたのが印象的だった。

特に主人公が憧れる先輩気象予報士・朝岡が言った言葉は忘れられない。

ある時、モネの幼馴染の漁師が、突然の悪天候で大時化の海域から抜け出せなくなる。モネは様々な観測データや持てる知識を総動員し、なんとか友人を救おうと動く。朝岡たちの協力もあって最善の予報と対策を示すことはできたが、それでも不安が収まらず、混乱したモネは「何かほかに手は！？」「近くを通る大型貨物船に救援要請を！」などと、現実的・効果的でない対策にすがろうとする。

その時、朝岡がこう諭す。

「誰かを助けたいという気持ちは持ってもいい。でも助けることに成果を求めてはダメですよ」

自然という、完全にはコントロールできない存在を相手に仕事をする者にとって、自分の限界や仕事の不確実性を理解しておくことはとても大切なことだ。下手な万能感や、実現不可能な目標設定は、不幸を招くだけである。

上記の朝岡の言葉は、自然を相手に働くプロフェッショナルとして、実に正しい態度だと思う。

昨今の何事も「エビデンス」や「数値化・見える化」が重視され、常に結果を出すことが当然とされる世の中で、この言葉はある意味時代に逆行することになるのかもしれない。だけど私は気象予報士と同様に、対人援助職にとっても、とても大事な考え方のように感じる。

ヒトという、必ずしも理屈だけでは動かない生き物。そんな自然の産物を相手に働く私たちは、すぐに成果を求めたり、確実な結果ばかりを期待してはいけない。そんな気がしている。

もちろん「誰かの役に立ちたい」とか「助けたい」という熱い想いは持つべきだし、常に今より良い支援を探求することは必要なことだ。しかし、その努力がいつも必ず報われるとは限らない。成果を過度に求め過ぎたり、周囲が義務付けるような風潮は、援助職にとっても、当事者にとっても幸せにはつながらないのではないだろうか。

近頃の福祉、医療、教育といった分野では、確実に見える成果に焦点が当てられ、稀に不幸な出来事が起こると、関係者の責任ばかりが取り沙汰される傾向がある。だがそれは果たして正しいアプローチなのか。天気予報が外れた気象予報士を血祭りにあげても、天気は変えられない。大切なのは、その先の知恵だと思えてならない。